

奥野高廣著「皇室御經濟史の研究」に対する授賞審査要旨

六

本書は前篇後篇の二冊より成る。前篇は四章十節に分ち、主として戦国時代の皇室經濟を研究の対象とし、的確なる材料に基きてその真相を闡明せんとせり。第一章は本書の序論とも見るべきものにして、上代より現代に至る皇室御經濟史、御領史及びこれに関する従前の研究を概観せり。第二章より第四章に至る三章は、本論にして、皇室御領、皇室決算等を詳叙す。即ち第二章に於ては室所時代前期の皇室御領として明かなるもの九十箇所以上、同後期所謂戦国時代には五十七箇所を数へ、その一々について沿革を述べ、御領の傳領、機構、貢納の三方面より研究して、特殊なる地位と永き傳統とにより、他の莊園とは自ら相違する形態の存することを説き、更に主殿寮領、禰家所領及び率分關等も御領として存続せる実状を明かにしたり。第三章に於ては、收支の実状を考察しその第一節には、皇室御領、率分關、供御人、定期、臨時の進献物等が、收入の対象なりとし、米穀は年約二百數十石、貨幣は大永元年より永祿十二年に至る四十九年間の平均收入高六百二十貫文に餘り、他に修理費の收入年平均百二十貫文以上に及びたることを示せり。第二節には、支出高及び決算を述べ、即ち米穀及び現金支出の内訳を考へ、現金に關しては的確ならざるも、米穀に關しては供御米は確保せられたる実証を挙げ、従來老人雑話、白石先生紳書等の所説に於て、戦国時代の皇室經濟の困難なりし状況が、過大に流布せられし事情を明かにせり。第四章「室町時代の皇室御經濟運用機關」の一章は、女官と禁裏御倉職とに分ち、各々の職掌歴史を調査し、女官が細心の注意を以て經濟の運用に當りし事實を詳述せり。以上を前篇の梗概とす。後篇は三章十節に分ち、第一章は前篇との聯絡を図る爲めの概説並に補説と見るべきものにして、五節に分ち、

第一節にては、皇居の沿革を記し、戦国時代にも相当に修築の行はれたること、並に御警衛の実状を闡明し、戦国時代の皇居に対する従来の傳説は史実にあらざることを論じ、第二節は禁裏の儀式に關して、表の儀式は幕府より費用の進献なかりし爲め中絶せしこと多きも、内廷の御儀式は滞りなく遂行せられたるを説き、その費用の概略を算出せり。第三節は供御に關して、戦国時代にも儀式の御膳に朝夕二回着御あらせられたることを実証し、第四節には、御領地人民豪族の勤王事蹟、庶民の勤王精神を明かにし、第五節には、従来の皇室式微に關する傳説の内容を述べ、之を公卿の日記等に照して、傳説の眞に背きたることを指摘せり。第二章は二節に分つ、第一節は安土時代、第二節は桃山時代の經濟を述べ、何れも御領を傳領、機構、貢納の三方面より見て、收入並に支出領を推計し、決算の実状を明かにせんと努めたり。第三章は、江戸時代の禁裏仙洞及び東宮の御經濟を敘述し、禁裏及び仙洞につきては、御領を傳領、機構、貢納の三方面より研究して、收入高並に支出高の内容を検し、決算の状態を観察し、この時代に於ける皇室經濟の豊富ならざりし實情を明かにせり。東宮につきては江戸時代以前と江戸時代に分ちて、その内容を考察したり。以上を後篇の梗概とす。

之を遍觀するに全篇に亘りて、その所説は総べて根本史料に基きて、その典據を註し、多くの新史料を援用し、計數を算定して、經濟内容の闡明に努めたり。史料援用の爲めには、昭和八年より十餘年に亘り史料編纂所、圖書寮、内閣文庫、京都帝國大學其他についてその蒐集に努め、又旧御料地にも出張採訪する所あり、従つて採録せる史料極めて豊富なるを見る。計數算定には、前篇第三章、戦国時代の收入に關する表示の如き、後篇第三章、禁裏收入、支出、決算の説明の如き、同仙洞經濟の如き、收入支出決算の如き、同東宮經濟の中「江戸時代の御經濟」の如き、何れも具体的に數字を挙げて之を計上し最も詳密なり。之に依りて、戦国時代の收入の最低額を示し、また供御米に御不足なかりしことを立証して、所謂皇室式微の眞相を明かにして、従来の誇大説を正し、又

江戸時代の決算の実状を精細に窺ふを得たり。

但し、前篇第二章に於て、諸司領として纔に主殿寮、率分関を説きたるのみにて、其他に及ばざりしこと、それぞれの時代に於ける物資の高下貨幣購買力の騰落の点を考慮せざりしこと、また後篇に於て禁裏御領及び仙洞御領の旧地に関する史料採訪の完結せざりしは遺憾なりとす。然りと雖も、これ等の点につきて全備を求むるは稍難きを恐ふる嫌なきにしもあらず。著者が細心精緻の研究は従来未だ曾て殆どその類例を見ざるものにして、学界に貢献する所多大なるものあり、正に推奨に値すべし。以上の理由に依り、本書は授賞の價値あるものと認む。